

代名詞と話者の認識

山 田 仁 子

[序]

本稿では、代名詞の使用に、話者が捉える聴者の意識だけでなく、話者自身の指示物に対する認識が反映する事を、明らかにしようと試みる。

[1-0]

本章では、過去の代名詞に関する研究を概観し、本稿で扱う問題点を明確にする。

[1-1]

代名詞に関しては、その照応関係について、文の範囲内での研究が数多く重ねられた。代名詞化 (pronominalization) の理論は、代名詞が同一指示の名詞句を、同一文中に持つ事を前提としていたため、文の外に先行詞を持つ代名詞を扱えなかった。そこで、代名詞は始めから代名詞として生成 (base-generated) した後、意味解釈規則を受けるとする理論が出された。しかし、文の枠を越えた代名詞の意味解釈を、文文法で規定できるわけではなく、文文法でも扱える、非同一指示関係の規定が試みられるに到った。Chomsky (1981) の束縛理論もその一つである。

しかし、こうした文文法を守る代名詞の、文の枠を越えた談話という範囲での解釈や使用については、まだ明確になっていない。代名詞化の理論の基盤にあった発想は、代名詞が先行する名詞句の言い換えだという事であったが、この定義が、実際の代名詞に必ずしもあてはまらないことは、Hankamer & Sag

(1977) や Yule (1979) の挙げる次の様な例より明らかである。

(1) [A large dog approaches A and B. A says to B:]

I hope *it's* friendly.

(Yule₁, 127)

(1)で代名詞 *it* は、言語内に言い換えるべき同一指示の名詞句を持たず、その指示物は言語外の物理的状況に求めねばならない。

更に、次に挙げる例(2), (3)においては、代名詞の指示する人物は、言語内のみならず言語外にも、先行談話には現れておらず、この代名詞により初めて登場する。

(2) "I don't want to swim any more. I look horrible, my timing is for shit. *He's* got two guys who are better than me swimming the fifty..."

(Guest, 73)¹

(3) "Haul my ass a little, tell me to shape up." A slight pause; a key change: "The way you used to do with *him*."

He looks up in surprise. "He needed it. You didn't..."

(Guest, 239)

(3)での聴者の驚きは、この代名詞 *him* の指示する人物が突然口にされた事に対するものでもある。(2)の *he* は水泳部のコーチ、(3)の *him* は話者の死んだ兄を指示するが、いずれの場合も先行詞は、言語内にも言語外の物理的状況にも現れていないのである。

聴者が(2), (3)の代名詞の指示物を理解するためには、言語内外の広い範囲での先行談話や、後続する内容が含む情報から、多くの推論を働かさねばならない。代名詞は次の例が示すように、聴者がその指示物を理解できることを前提とする表現ではある。

(4) i) A: John killed a cop.

B: Oh yes, I know which one it is.

ii) A: John killed him.

B: **Oh yes, I know who he is. (Erteschik-Shir, 447)

しかしこれはあくまで話者側からの仮定であり、実際には聴者に理解し難い代名詞の使用も可能である。(2), (3)のように、聴者に多くの推論を要求する代名詞の使用は、その時点での聴者の意識に合わせた使用というより、話者側の一方的な仮定による使用と思われる。このような一方的な仮定をするには、話者側にそれだけの原因があると予想される。

また、先行詞が存在すると言えるような場合でも、次の例(5)に見られるように、性・数が同じで直前にある名詞句を指さず、数行前のものと同一指示の代名詞もある。

(5) *He_i waits patiently for the sports section. His grandfather_j reads every article, chuckling, rattling the paper at the stuff he_j likes; grumbling and crossing his_j legs when something annoys him_j. He_i leafs through his_i section casually, reading a dull article on...* (Guest, 194)²

四行目の *He* は直前の *him* とは別の人物で、一行目の *He* と同一指示である。この場合の代名詞使用を支えるのも、聴者より話者側の要因であると予想される。

以下、第二章、第三章において具体的な例を検討しながら、代名詞使用を決定する要因が話者側自身にもあるという予想が正しいものであることを示し、この話者側の要因が何であることを明らかにしていく。

[2-0]

前章で見たように、代名詞には、先行詞が現れている場合と現れていない場合があり、先行詞が現れている場合には更に、先行詞が代名詞の直前にある場

合と、性・数同じ他の名詞句を間において離れている場合とがある。つまり、代名詞の現れる状況は、1. 先行詞が直前にある。2. 先行詞が離れた地点にある。3. 先行詞がない。という三つのタイプに分けられる。なお、1と2の区別は、代名詞と同じ性・数の名詞句が、代名詞と先行詞の間に存在するかしないかという点に依るものである。

本章では、この代名詞の現れる三種の状況について、順を追って検討していく。

[2-1]

本節では、あいまいさを残さず直前に先行詞がある状況を検討する。

間に他の名詞句が介入しなければ、指示物を導入する名詞句は本来、代名詞へと続くことも、定名詞句へと続くこともあり得る。どちらの場合でも、指示関係にあいまいさは残らず、聴者の解釈に影響を及ぼすことはない。このような状況で二形式が使い分けられるという事からも、代名詞使用にも話者側の要因が関係している事が予想される。以下、二形式の相違を分析する。

次に挙げる例(6)では、一度登場した人物が、すぐには代名詞で受けられず、様々な形の名詞句で示される。

- (6) *Andrew* has always been the imp perverse of the royal household... *The "Randy Andy"* of the tabloids cavorted with beauty queens, topless lovelies and... Beneath all the headlines, however, was a boyish loner... After three months of hard combat in the Falklands war in 1982, *the young prince* spoke movingly of the fear he felt... *An amateur photographer, Andrew* once described the theme of his work as "loneliness."

What *he* really needed, many friends thought, was a good common-sense girl. (Time, 48)

多くの名詞句は、一人の人物が周囲の人々から、様々な捉えられてきた外面的

な姿を表している。その内面的な部分を描写する箇所において初めて、この人物は代名詞で指示されるのである。

次の例(7), (8)では、一度代名詞で指示された人物が、逆に、改めて名詞句で指示されている。(7)の *he* と *Mr Curry*, (8)の *she* と *Mrs Mason* は、それぞれ同一人物である。

(7) She thought, *he* is obviously a very sensitive man, *he* can read between the lines... *he* knew, *he* understood.

Mr Curry dried his hands... (Hill, 43)

(8) 'Your other sister died, too.'

He had been rooting about, *she* thought in dismay. 'She died before all the scandal,' *Mrs Mason* said grimly. 'She was spared.' (Taylor, 12)

(7)の代名詞及び名詞句の現れる環境は、(6)の場合と似ている。第一に代名詞の指示物の捉え方がどちらも内面的な部分に向いている。(6)では *need*, (7)では *know*, *understand* などの描写がこれを示す。第二に、同一人物を名詞句で指示する部分は、前の思考からは切り離された、外面から捉えられる客観的な描写である。³

(8)の場合も、代名詞と名詞句に結びつく動詞の違いが、二形式の違いを示している。代名詞は *thought* と結びつき、名詞句は *said* と結びついているが、一人物の存在を、思考の主体として内面的部分から捉えているのが代名詞であり、会話のやりとりをする対外的面から捉えているのが名詞句なのである。

次の例(9)には、二人の人物が登場するが、一人は終始代名詞で指示され、もう一人は終始名詞句で指示されている。

(9) ... *He— um ... a girl ... with long pigtails,*
... happens by going the other way ... on a bicycle.
And there's a long shot,

... you see both of them .. converging
 and you see *him*.
 ... *He's* more interested in
 ... *the girl* going by
 ... than ... taking care of.. making sure the basket doesn't do
 anything weird.
 ... And *he* sees *the girl* going by,
 ... *he* doesn't see the rock (Clancy, 187)

この二人の人物は性が異なり、仮に両方代名詞が用いられてもあいまいさはない。それにも拘らず一方だけ代名詞、もう一方は定名詞句と使い分けられているのは、話者側の二者に対する認識の違いが反映しているものと考えられる。

この例でそれぞれの表現に結びつく描写を較べる。代名詞 *he* の場合、*you see him* が、話者の注意が *he* に向いており、話者が聴者の注意も *he* へ持っているように示す。ここには指示物に対する心的接近がみられる。また次の *He's more interested in...* の部分は、内面記述である。一方、名詞句 *the girl* の場合、これに結びつくのは、*going by* という外面記述のみである。

以上、この節で見てきた例をまとめると、定名詞句は人物を客観的に距離を置いて見た面を表し、代名詞は人物を内面的に、あるいは心的距離を置かずに見た面を表す、と言えよう。⁴ つまり、話者が指示物に対して抱く認識が二つの表現形式に反映されるのである。

ただし、ここでいう話者とは、話者自身の場合の他に、言語内に現れる人物の場合がある。(8)、(9)は、話者が指示物に対して抱く心的接近が代名詞表現に、客観的距離が名詞句表現に反映しているが、一方、(7)では、登場人物 *she* が指示物 *Mr Curry* に対して抱く認識の違いが、代名詞 *he* と名詞句 *Mr Curry* に反映されているのである。

[2-2]

本節では、先行詞が離れている状況を検討する。つまり、先行詞よりも近く

に、性・数が一致する別の名詞句が存在する代名詞の場合である。

次に挙げる例(10)で、代名詞 *He* は、距離的には近い性・数同じの人物 Stillman を指してはいない。

- (10) Lazenby_i and Van Buren_j laugh. The remark has an indelible quality that makes Conrad_k's skin prickle. Stillman_i is an expert at that:... *He_k* wills his mind to slip over it...

(Guest, 17)

ここで気付くのは、代名詞 *he* が、前節で見た *thought* と同様にこの人物の内面を記述する表現 *wills* と結びついている事である。この内面記述は、筆者が *he* の指す人物に感情移入 (*empathy*) を置いていることを示し、更には、筆者が登場人物に対して抱く、あるいは、筆者が読者に登場人物に対して抱かせようとする、心的距離の接近を表す。これは、前節で述べた、代名詞が心的距離を置かずに見た人物を指示するという事と一致する。指示される人物 Conrad に *empathy* による心的接近が既にあることは、*makes Conrad's skin prickle* といった表現から明らかである。

次の例(11), (12)においては、*his* や *her* といった所有格が、そこに *empathy* のあることを示す。⁵

- (11) After dinner *he_i* and *his_i grandfather_j* sit in the living room..., while, in the kitchen, *his_i grandmother* does the dishes. *He_i* listens to the comforting sound of her bustling about...

(Guest, 194)

- (12) But in truth *her_i mother_j* had watched variety shows... whereas *she_i* herself would have chosen B. B. C. 2 and something cultural or educational.

(Hill, 26)

his grandfather や *her mother* 全体の指す人物ではなく、この中の *his* や *her* といった、*empathy* の置かれる人物の方を、続く代名詞は受けているので

ある。⁶この場合も代名詞の指示関係は、心的距離の接近という事で説明できる。

次の例(13)には、二人の男性が登場するが、一人だけが一貫して代名詞で指示され、他の一人は、一貫して名詞句で指示される。

(13) “You don’t understand,” *he* says. “... Or what was the whole goddamn point of it?”

“The point of it,” *Berger* says, “is that it happened.”

“No! That’s not it! That is too simple—”

“Kiddo, let me tell you a story,” *Berger* says. “... So, where is the sense in that, huh? Where is the justice?”

“There isn’t any,” *he* says dully.

Berger holds up his hand.... (Guest, 206-207)

会話で二人は交互に現れるため、*he* が *Berger* に解釈される虞れはないが、この二形式の使い分けはやはり、指示物に対する心的距離の違いを反映したものである。次の(14)は、(13)の付近からの引用であるが、*cannot answer*, *does not have an answer*, *feels* 等は、*he* の内面描写であり、*he* に対する心的接近があることを裏付けているからである。

(14) *He* cannot answer, does not have an answer... *He* feels as if *he* is seeing *Berger* through a curtain of mist. (Guest, 207)

代名詞に反映される心的距離に、話者と指示物間の場合と、言語内に現れる人物と指示物間の場合があることは先に述べた。(10)～(13)は、話者(筆者)と指示物の場合であったが、次に挙げる(15)は言語内に現れる人物(一登場人物)と指示物の場合である。

(15) *He* continues to prowl around the room... On further examination, *he* resembles a compact, slightly undersize gorilla. *Conrad* cannot take his eyes off *him*. (Guest, 37)

最後の文の *cannot take his eyes off* の部分は, Conrad に *empathy* がある事を示しているが, 前の文中の *further examination, resembles* は, Conrad の注意が *he* に集中し, *he* について思考を巡らしている事を示している。*empathy* による話者 (=筆者) の Conrad への心的接近より, 注意集中による一登場人物 Conrad の *he* への, 心的接近の方を, ここでの代名詞は優先して反映しているのである。⁷

話者と指示物, 言語内の一人物と指示物と, 二つのレベルで心的接近が見られる場合, 上でみた(15)のように, どちらか一つが選択されることもあるが, 次の(16)のように, 両方共代名詞の使用に反映されることもある。

(16) *Berger_j just laughed... His_i sweater bagging and flapping about his_i hips; his_i hair floating. He_j has never known what to expect of the guy_i.*

He_j had tried, then, to thank him_i properly. (Guest, 242)

この例の前半は, *he_j* が *he_i* (=Berger) を注意深く観察する描写であり, 後半は, *known* が示す通り, 筆者が *he_j* に *empathy* を置いた表現となっている。*he_i* は, *he_j* が *he_i* (=Berger) に対して抱く心的接近, *he_j* は, 筆者が *he_j* に対して抱く心的接近を反映している。

以上, 先行詞が離れている状況を検討してきたわけであるが, 第一節で提案したことが, ここでも説明力を持つ事が明らかになった。つまり, 話者あるいは言語内の一人物が指示物に対して抱く, 心的距離を置かない認識が, 代名詞に反映されるのである。

[2-3]

本節では, 先行詞がない状況を検討する。

第一に, 会話でなく, 独白や, ある人物の思考内容の描写においては, 初めて登場する人物でも, 完全な名詞句でなく代名詞で指示されることが多い。次に挙げる(17), (18)はその例である。

(17) Idly, he opens the desk drawer, sifting through a pile of papers: old stuff, schedules, letters, scraps of notes written long ago. Funny *she* has never cleaned out this drawer. He should do it, maybe sometime he will.... (Guest, 23)

(18) He studies the shades of green... And other things that make him feel good: the clean flight of the ball on a good drive, the graceful blue-and-orange swallows that dip and swerve across the fairways. Gestures. He is learning to interpret them now. In a letter that *she* wrote to his grandmother she said...

(Guest, 244)

(17)で、*he* の指し示す人物がひき出しを開ける行為に続く、ひき出しの中の物の羅列は、彼の視線の動き、目に知覚される順序に合わせた描写である。これに続く、*funny* という語は、明らかに、彼の気持ちを直接に表現しており、この例の最終部分も、彼の思考を殆んどそのままの形で地の文に写したものである。先行詞のない代名詞 *she* は、この様な、彼の思考の中に浮かんだ人物を指示している。

(18)についても、*he* の指し示す人物が物思いに耽ってゆく様子が描かれ、その思考の描写の中で、先行詞のない代名詞 *she* が現れているのである。

解釈する立場から見ると、上の例(17)、(18)に含まれる、先行詞のない代名詞は、多くの推察を要求する。これは、決して受け手の理解を考慮の中心に入れた代名詞の使用ではない。話者 *he* が彼自身の心の中で思考を巡らす箇所であるから、この様な代名詞使用が許されるのである。話者が思考内に滞るならば、事物を明確な名詞句により確認する必要はない。逆に、ここで *she* の代わりに、*his mother* 等の名詞句が現れるとすると、この人物を確認し、談話に導入しようとする筆者の意図が見えてしまう。(17)、(18)における先行詞のない代名詞は、これを含む部分が、一人物（ここでは *he*）の心を、そのままに伝えている事を教えているのである。また、思考内の人物に対して心的な客観的距離は保ちにくく、この点からも思考の内容を表す描写中に代名詞が現わ

れることは自然である。

第二に、先行詞のない代名詞は、会話においても、時に例(19)～(21)のように起こり得る。

(19) (= (1)) [A large dog approaches A and B. A says to B:]
I hope *it's* friendly.

(20) [Football fan to favorite team:]
Give *'em* hell. (Bolinger, 290)

(21) [Pointing at a group of five boys, one of whom is crying, A says to B:]
He has just been scolded. (Sperber & Wilson, 79)

(19)で代名詞の指示物は、言語内には現れないが、言語外の状況に存在し、これより、聴者も、代名詞 *it* を理解可能である。(20)、(21)における代名詞の指示物も、言語外に存在するが、この場合指示物を決定するのは、指示物が目の前に存在するという物理的状況だけではない。(20)ならば、敵、味方といった心理的状況、(21)ならば、叱られる事と泣く事が結びつくといった意味関係も、これら代名詞の指示物を決定し解釈するのに必要である。

次に挙げる(22)では、この様な推論の材料となる状況を、言語を用いて設定することにより、先行詞のない代名詞の解釈を可能にしている。

(22) There's a line in one of Hemingway's books. I think it's from *For Whom the Bell Tolls*. *They're* behind the enemy lines, somewhere in Spain, and *she's* pregnant. She wants to stay with *him*. He tells her no. (Terkel, 10)

小説の一場面が設定されるため、*they* の指示するのはその場の登場人物たち、*she* はヒロイン、*he* はヒーローと解釈可能なのである。⁸

しかし、本稿始めに挙げた次のような例では、物理的状況といった要素は殆んど見られない。

(23) (= (2)) "I don't want to swim any more. I look horrible, my timing is for shit. *He's* got two guys who are better than me swimming the fifty..."

(24) (= (3)) "Haul my ass a little, tell me to shape up." A slight pause; a key change: "The way you used to do with *him*." He looks up in surprise. "He needed it. You didn't..."

強いて言えば、(23)においては水泳の話題、(24)においては叱るという事が指示物とつながるが、ここに要する推論は(21)の場合よりも更に大きい。(23)、(24)の代名詞では、聴者の意識に合わせるというより、話者側の意識を反映させることの方が優先されていると思われる。つまり、以上本章で述べてきた、話者が指示物に対して抱く心的距離の接近で説明されるのである。ここで、この二例をより広い談話の中で再検討する。

(25) (= (23)) "... something is making you nervous. Now what is it?"

He sits up; reaches for his coffee. "Okay, I know what it is. I don't want to swim any more. I look horrible, my timing is for shit. *He's* got two guys who are better than me swimming the fifty, and, anyway, I don't give a damn about those guys.... And I can't stand him, he's a tight-ass son of a bitch—" He breaks off, clamping his teeth over the rest of the words, gripping his knees, his stomach in knots.

"Well," Berger says... "Well, why don't you quit then?"
...

"So, tell me about the coach," Berger says. "How come

he's a tight-ass son of a bitch?"

(25)で代名詞が現れる部分が、二行目の what is it (=something making you nervous)? という質問に対する解答の中で現われていることに注目したい。解答として出されるのは、泳ぎたくないという事と、コーチに関する嫌な思いの二点であり、これは、質問した Berger が解答を聞いた後に示す二つの反応、Why don't you quit? と tell me about the coach から明らかである。特に第二のコーチに関する点については、解答者は話すにつれ激して行っている。質問を受けた時から、彼の心にはコーチが浮かび、客観的距離を置かない程、この人物が強く意識されていた事は十分に予想される。コーチに対して話者は、客観的な心的距離を失っている。コーチを指す代名詞の使用は、この様な話者側の心的接近を反映したものとして説明される。

(24)の代名詞が現れる文は、前にポーズが置かれている。このポーズは、話者が何かをじっと思っていることを示唆する。そこでの代名詞使用は、代名詞の指示物である死んだ兄の事を、客観的距離を置けないまま思いつめている話者の心情を反映していると解釈される。

以上、本章では、代名詞の現れる主な状況を検討してきたが、第一節で見た、定名詞句と使い分けられる代名詞、第二節で見た、性・数同じでかつ近い名詞や代名詞を越えて先行詞を持つ代名詞、第三節で見た、先行詞を持たず突然に出される代名詞、これら全ての代名詞の使用は、話者や談話に現れる人物が指示物に対して抱く心的距離の接近で説明されたのである。

[3-0]

本章では、前章でみた指示物に対する心的距離の接近という要因以外で、代名詞使用に働く要因を探る。

[3-1]

本節では、代名詞使用が談話構造とも関係づけられることを明らかにする。

次の三例には代名詞 *he* で指示される人物が各例とも二人ずつ登場する。

(26) (= (5)) *He_i* waits patiently for the sports section. *His_i grandfather_j* reads every article, chuckling, rattling the paper at the stuff *he_j* likes; grumbling and crossing *his_j* legs when something annoys *him_j*. *He_i* leafs through *his_i* section casually, reading a dull article on...

(27) “Right,” *he_i* says....

Berger_j leans back in the chair, hands behind *his_j* head. It is hard to figure *his_j* age. *He_j* could be twenty-five. *He_j* could be forty. “So, what d’you want to work on?” *he_j* asks....

He_i thinks, then, of *his_i* father... (Guest, 39)

(28) *Bacon_i* had not approved of law students who... Diffusion of energy, *he_i* called it.... *Bacon_i* was a man of strong views. *He_i* had principles. Integrity. *He_i* knew who *he_i* was and where *he_i* stood on certain — what *he_i* considered — inviolable issues. *Bacon_i* had been *Cal_j*’s first actual experience with loss.

When *he_j* was eleven, *he_j* learned the association of that word with death. The director of the Evangelical Home had called *him_j* in to tell *him_j* of *his_j* “loss.” (Guest, 46)

(26)においては、*his grandfather* を文頭に持つ文の中と外、(27)では、*Berger* を始めに持つ段落の中と外、(28)では、*Bacon* を始めに持つ段落の中と外で、代名詞 *he* の指示する人物が異なる。文や段落の外での代名詞は、前章第二節で見た、先行詞の離れた代名詞の場合と同様で、話者がこの人物に対して抱く心的接近の反映として説明されるが、中の代名詞には他の説明が必要である。先行詞との物理的距離の接近がその使用の要因である様に見える。しかしこの距離は、全く機械的に測定されるものではなく、文や段落の枠の中に、共に存在するという意味での距離が、重要な意味を持っているのである。

一般的に、文や段落はその中での話題 (topic) を持ち、文や段落の変わり目と話題の変わり目は一致しやすい。(29), (30)もその例である。

(29) O-Tsuyu; grew up to be a very beautiful girl; but at the age of fifteen *she*; fell sick, and the doctors thought that *she*; was going to die. In that time the nurse O-Sodé;, who loved O-Tsuyu; with a real mother's love, went to the temple Saihōji, and fervently prayed to Fudō-Sama on behalf of the girl;.

(Hearn, 329)

(30) As Pattie rose, Muriel; came and stretched herself out on the bed.... *She*; lay there...., *her*; arms straight by *her*; sides, the little plume of breath hanging above *her*; lips. *She*; seemed already to have lost consciousness.

Pattie; stumbled out of the door, leaving it open. *She*; crawled along the wall of the corridor like a bat. Tears gushed from *her*; eyes and nose and mouth. *She*; would have to go, *she*; would have to leave him at last....

(Murdoch, 202)

(29)に含まれる二つの文は複数の統語的文から成っている。これは文のまとまりを、O-Tsuyu と O-Sodé という二つの話題各々についてのまとまりと、一致させたものと思われる。この例は文と話題が、密接に結びついていることを示している。こうしたまとまりの中で話題となる人物は、代名詞で指示されるが、そこから外れると、新たに名詞句で示される。(29)、三～四行目の O-Tsuyu がそれである。

(30)では、段落は各々 Muriel と Pattie という話題を持ち、それでまとまっている。段落と話題も密接に関連するのである。各段落内で、それぞれの話題は、文の場合と同様に終始代名詞で指示されている。

また、次の例の様に、同一人物を話題とし、各段落内では終始代名詞で指示される場合でも、段落の変わり目では、その同じ人物が名詞句で新たに明示される事がある。これは、話題の指示物を中心とするつながりが段落の変わり目

で弱まることを示している。

- (31) It took *Muriel* a little time to be absolutely certain that they were gone. *She* blinked *her* eyes. *She* looked at the other shelves and...

Muriel had been in a sort of hysterical coma ever since *she* had woken up. Now *she* became... (Murdoch, 206)

このように、文や段落といった枠は、代名詞の使用に深い関わりを持つ。⁹特に文の枠内では、(32)の様に現実世界に存在しない物も代名詞で受けられるが、これは、文という枠のつながりの強さを示している。

- (32) Nobody thinks *he's* sick. (Bosch, 65)

また、章や談話全体といった広い枠の中で、代名詞が一人物を指示し通す場合もある。次の例(33)で代名詞 *he* は文や段落の枠を越え、章の枠内で、章題の人物を指示している。

- (33) **BILLY CARPENTER;**
Newburgh, Indiana is Lincoln boyhood country. It borders...
He_i is twelve. *He_i* has been a newsboy, off and on, for seven years. *He_i* delivers by bicycle. After school each day *he_i* works *his_i* paper route for about an hour. (Terkel, 11)

この様に、文、段落、章、といった様々なレベルで談話の枠が見られるが、各々の枠で、中心となる話題を指示する代名詞の使用がみられた。

この代名詞使用にも、話者の意識が反映されている。文、段落、章に表す意味のまとまりは、話者自身の物事の捉え方に対応したものであり、物事を認識する拠り所としたものが話題として代名詞で指示されるのである。¹⁰

[3-2]

本節では、前節で論じた、代名詞使用に関わる、談話の枠で話題を指示するという要因が、第二章で論じた、心的距離の接近を反映するという要因と、どのように組み合わさるのか検討する。

次の例(34)では、代名詞は心的接近を反映し、かつ、段落の話題を指示している。

(34) 'Oh, I've had such a curious dream!' said Alice_i, and she_i told her_i sister_j, as well as she_i could remember them... and when she_i had finished, her_i sister_j kissed her_i, and said...

But her_i sister_j sat still just as she_i left her_j, leaning her_j head on her_j hand, ... and thinking of little Alice_i and all her_i wonderful Adventures, till she_j too began dreaming after a fashion, and this was her_j dream:—

First, she_j dreamed of little Alice_i herself... (Alice, 159)

始めの段落で *her_i sister_j* は二度も現われる。これは、一貫して、*her_i* の指示する Alice に empathy が置かれている事を示している。つまり Alice に対する心的接近が見られる。またこの段落の話題も、Alice である。次の段落では、empathy が *her sister_j* (Alice の姉) に移り変わることが、*little Alice_i* という表現により示される。しかし、一行目の *her_i sister_j* や、*she_i, her_j* という表現は、ここではまだ empathy が移り切れず、移り替わる途中であることを示している。一方、話題としては、*her sister_j* が話題を導入する名詞句として働き、以降、これを指示する代名詞が続く。第三段落は、始めから *she_j* が使われ、この人物から見た表現 *little Alice_i* が現れる事から、empathy が置かれているのも、段落の話題も、*she_j* (Alice の姉) で一致している。この例では、第二段落に多少のずれはあるが、話題を示すという要因も、心的接近を反映するという要因も、一つの代名詞に統一して働いているのである。

しかし、次の例では、二つの要因がはっきり分かれる。

(35) (= (5)) 26

On Sunday, at breakfast, *his*_i grandmother asks...

After dinner *he*_i and *his*_i grandfather_j... *He*_i waits patiently for the sports section. *His*_i grandfather_j reads every article, ... rattling the paper at the stuff *he*_i likes; grumbling and crossing *his*_i legs when something annoys *him*_j. *He*_i leafs through *his*_i section casually...

(36) (= (27)) "Right," *he*_i says...

Berger_j leans back in the chair, hands behind *his*_i head. It is hard to figure *his*_i age. *He*_i could be twenty-five. *He*_i could be forty. "So, what d'you want to work on?" *he*_i asks....

*He*_i thinks, then, of *his*_i father...

(35)で、筆者あるいは筆者がたてる架空の視点から、指示物に対して抱く心的接近を反映した代名詞 *he*_i は、段落の枠内でも、章の枠内全体でも、名詞句で指示され直すことなく、一貫して現れる。この代名詞については、心的接近を反映し、かつ、段落の枠、章の枠の中心となる話題でもあるのである。その中に、文の枠に守られて、*his grandfather*_j を指示する代名詞が現れるが、これは、文の話題であるだけで、心的接近を反映するものではない。

(36)も(35)と同様で、心的接近を反映する代名詞が、話題を示す代名詞でもあるという大きな談話の枠があり、その内側に、より小さい談話の枠がある。その小さな枠内に現れる代名詞は、その枠内限りの話題を指示する。¹¹ (35)、(36)で唯一異なる点は、中に入り込む小さな談話の枠が、(35)では文であり、(36)では段落であるという事だけである。この二例で、異なる人物を同形の代名詞 *he* で、指示できるのは、レベルが異なる談話の枠内に現れるからというだけでなく、各々の人物に対して代名詞使用を支える要因に差があるからである。ここでは、広い枠で話題を指示する代名詞だけが、話者の指示物に対する

心的接近を反映している。

このように、代名詞使用における、心的距離の接近を反映する要因と、話題を示すという要因は、同一の代名詞の上に投影されることもあるが、ずれて別々の代名詞に投影されることもある。この二要因は、一つにまとめられるものではなく、別個に存在するのである。

[結論]

本稿では、代名詞使用を決定する、話者側からの要因が、二種類存在することを明らかにした。

先ず、第二章で、話者が指示物に対して抱く心的距離の接近が、代名詞表現に反映される事が明らかになった。ただし、間接的に描写される箇所では、代名詞に反映される心的距離を抱く主体は、話者自身の場合と、言語内に現れる人物の場合がある。

次に、第三章で、話題を示すという第二の要因も代名詞使用に働くことが明らかになった。話題とは、文、段落、章、といった様々なレベルの談話の枠の中心であり、談話発展の拠り所である。話者の物事の捉え方を写すのが、談話の枠という意味のまとまりであり、物事を捉える拠り所となるのが話題であるから、この第二の要因も、話者の指示物に対する認識に関するものと言える。

この二つの要因はそれぞれ、話者の指示物に対する二種類の認識の仕方を代名詞表現に反映させるものであるが、二種類の認識は相反するものではなく、重なり合うこともある。よって、代名詞表現にも、一方の認識だけを反映したものもあれば、両方の認識を同時に反映したものもあるのである。

[註]

- 1 各例において、問題となる代名詞等については、適宜、斜字体で示した。
- 2 指数 i, j 等により、指示物の別を示した。
- 3 更に、(6)、(7)とも *thought* が示すように、代名詞は思考内容の表現の内に現われている。これは本章第三節で述べる、独白的な思考内容の中に現われる代名詞と一致する。ただ三節では思考が直接に記述され、本節の例では間接的に記述されているという点が違うだけである。

- 4 Kuno (1976) の empathy も、これに含まれる。
- 5 Kuno & Kaburaki (1977) で、所有格と empathy の関係が述べられている。
- 6 但し、性・数同じの代名詞所有格を含む名詞句の後に現れる代名詞は、(18), (19) の様に、所有格の人物と同一指示になるとは限らず、次の例の様に、名詞句と同一指示の場合もある。

So Alice got up and ran off...

But *her sister* sat still just as she left her, leaning her head on her hand, ... till *she* too began dreaming after a fashion, and this was her dream:—

First, *she* dreamed of *little Alice* herself... she could hear the very tones of her voice... and... the whole place around her became alive with the strange creatures of *her little sister's* dream. (Alice, 159)

代名詞所有格を含む表現は、empathy の移動を誘導する。一段落始めの *her sister* は Alice に empathy を置いた表現であるのが、この名詞句全体を *she* で受けることで、empathy は姉に移り、今度は Alice が *her (little) sister* で表現されている。

- 7 例(15)により、本稿で言う心的距離の接近が、empathy だけと一致するものでないことが明らかである。
- 8 但し、he, she は、対で使われることで、中心のカップルを示し得る。単数・男性、単数・女性という素性こそ生きる状況であることが示されるためと思われる。
- 9 幾つかの段落が集まって一つの意味のまとまりを成す場合もある。下の例では、第一段落と第三段落には固有名が現れるが、第二段落には代名詞のみ現れる。機能的には、始めの二つの段落は二つで一つの段落の役割を果たしているのである。

It occurred to *Muriel* to notice, and she noticed it grimly, that... She half decided to leave the tablets behind, but some old prudence turned her back ...

She put her suitcase down beside the hall door and mounted the stairs again... She reached her own room and...

It took *Muriel* a little time to be... (Murdoch, 206)

- 10 Hinds (1977), (1979) は、段落の話題 (Paragraph Topic) と代名詞のつながりを論じ、Clancy (1980) は、談話の区切りと、名詞・代名詞の関係を論じている。また Chafe (1980) は、文も一つの idea unit であると述べている。
- 11 Longacre (1979), Hinds (1979) は、段落に注目して談話の構造を体系づけたが、本稿の例(35) (36)は、談話の構造が、線的でなく立体的組み合わせである事を、証明している。

[参考文献]

- Bolinger, D. (1979), "Pronouns in discourse," in T. Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, New York: Academic Press, 289-309.
- Bosch, P. (1980), "The modes of pronominal reference and their constraints," in

- J. Kreiman & A. E. Ojeda (eds.), *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora*, Chicago, Illinois: CLS
- Brown, G. & G. Yule. (1983), *Discourse Analysis*, Cambridge University Press.
- Chafe, W. L. (1980), "The deployment of consciousness in the production of a narrative," in W. L. Chafe (ed.), *The Pear Stories: Cognitive, Cultural and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Norwood, N. J.: Ablex.
- Clancy, P. M. (1980), "Referential choice in English and Japanese narrative discourse," in W. L. Chafe (ed.), *The Pear Stories: Cognitive, Cultural and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Norwood, N. J.: Ablex.
- Clark, H. H. & T. B. Carlson. (1981), "Context for comprehension," in J. Long & A. Baddeley (ed.), *Attention and Performance IX*, Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Erteschik-Shir, N. (1979), "Discourse constraints on dative movement," in T. Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, New York: Academic Press, 441-467.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan. (1976), *Cohesion in English*, Longman.
- Hinds, J. (1977), "Paragraph structure and pronominalization," *Papers in Linguistics 10*, 77-99.
- . (1979), "Organizational patterns in discourse," in T. Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, New York: Academic Press, 135-157.
- Hirst, W. & G. A. Brill. (1980), "Contextual aspects of pronoun assignment," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 19*, 168-175.
- Kuno, S. (1976), "Subject, theme, and the speaker's empathy—a reexamination of relativization phenomena," in C. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York: Academic Press.
- . & E. Kaburaki. (1977), "Empathy and syntax," *Linguistic Inquiry vol. 8*, 627-672.
- Longacre, R. E. (1979), "The paragraph as a grammatical unit," in T. Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, New York: Academic Press, 115-133.
- Malt, B. C. (1985), "The role of discourse structure in understanding anaphora," *Journal of Memory and Language 24*, 271-289.
- Murphy, G. L. (1985), "Processes of understanding anaphora," *Journal of Memory and Language 24*, 290-303.
- Ota, A. & M. Kajita. (1974), *Grammar II: A. Ota (ed.) Outline of English Linguistics vol. 4*, Tokyo: Taishukan Publishing Company.
- Sag, I. & J. Hankamer. (1977), "Syntactically vs. pragmatically controlled anaphora," in R. W. Fasold & R. W. Shuy (eds.) *Studies in Language Variation: Semantics, Syntax, Phonology, Pragmatics, Social Situations, Ethnographic Ap-*

- proaches*, Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Sperber, D. & D. Wilson, (1982), "Mutual knowledge and relevance in theories of comprehension," in Smith, N. (ed.) *Mutual Knowledge*, London: Academic Press.
- Tyler, S. A. (1978), *The Said and the Unsaid*, New York: Academic Press.
- Webber, B. L. (1978), *A Formal Approach to Discourse Anaphora*, Cambridge, Mass.: Bot, Beranek & Newan.
- Yule, G. (1979), "Pragmatically controlled anaphora," *Lingua* 49, 127-135.
- . (1981), "New, current and displaced entity reference," *Lingua* 55, 41-52.

[例文の出典]

文例は次の著作による。本稿においては書名、あるいは作者名の一部を略記した。

- Alice/ Carrol, L. (1865), *Alice's Adventures in Wonderland*, Puffin Books.
- Guest/ Guest, J. (1976), *Ordinary People*, New York: Ballantine Books.
- Hearn/ Hearn, L. (1904), *Kwaidan*; rept. in King F. (ed.) *Lafcadio Hearn: Writings from Japan*, Penguin Books.
- Hill/ Hill, S. (1971), "A bit of singing and dancing," in Funato, H. & Hattori, Y. (eds.) *Three Short Stories by British Women Writers*, Tokyo: Yumi Shobo.
- Murdoch/ Murdoch, I. (1966), *The Time of the Angels*, Triad/Granada.
- Taylor/ Taylor, E. (1969), "Sisters," in Funato, H. & Hattori, Y. (eds.) *Three Short Stories by British Women Writers*, Tokyo: Yumi Shobo.
- Terkel/ Terkel, S. (1972), *Working*, New York: Ballantine Books.
- Time/ Time*, 4 Aug. 1986.